

次 目

即位禮勅語	本
道風德香	本
立正大師の功勳	多
日什大正師略傳	多
聖訓摘要	日
教報	生

號月二十年三十三第



四月發行 本多日生著

信仰修養、思想
より論じたる

日蓮主義の本領

定價金貳圓五拾錢
二八頁
【送料十二錢】

目次(總の部)

- 一、信仰と修養と思想
- 二、信仰修養思想と立正大師
- 三、教育勅語の解釋と應用
- 四、思想の基準

(信仰の部)

- 一、眞の佛と眞の我
- 二、信心と正憶念
- 三、菩薩行

(思想の部)

- 一、國人と教
- 二、東洋思想の大共通點

以上

右は中央出版社の發行なるも統一發行へ申込まるれば二割定價より割引する事となれり希望者は統一發行所へ申込まるべし

即位禮勅語

朕惟フニ我力皇祖皇宗惟神ノ大道ニ遵ヒ天業ヲ經繪シ萬世不易ノ丕基ヲ肇メ一系無窮ノ永祚ヲ傳ヘ以テ朕カ躬ニ逮ヘリ朕祖宗ノ威靈ニ賴リ敬ミテ大統ヲ承ケ恭シク神器ヲ奉シ茲ニ即位ノ禮ヲ行ヒ昭ニ爾有衆ニ誥ク
皇祖皇宗國ヲ建テ民ニ臨ムヤ國ヲ以テ家ト爲シ民ヲ視ルコト子ノ如シ列聖相承ケテ仁恕ノ化下ニ洽ク兆民相率キテ敬忠ノ俗上ニ奉シ上下感孚シ君民體ヲニス是レ我國體ノ精華ニシテ當ニ天地ト並ヒ存スヘキ所ナリ
皇祖考古今ニ鑒ミテ維新ノ鴻圖ヲ闢キ中外ニ徵シテ立憲ノ遠猷ヲ敷キ文ヲ經トシ武ヲ緯トシ以テ曠世ノ大業ヲ建ツ皇考先朝ノ宏謨ヲ紹繼シ中興ノ丕績ヲ恢弘シ以テ皇風ヲ宇内ニ宣フ朕寡薄ヲ以テ忝ク遺緒ヲ嗣キ祖宗ノ擁護ト億兆ノ翼戴トニ賴リ以テ天職ヲ治メ墜スルコト無ク愈ツコト無カラムコトヲ庶幾フ
朕内ハ則チ教化ヲ醇厚ニシ愈民心ノ和會ヲ致シ益國運ノ隆昌ヲ進メンコトヲ念ヒ外ハ則チ國交ヲ親善ニシ永ク世界ノ平和ヲ保チ普ク人類ノ福祉ヲ益サムコトヲ冀フ爾有衆其レ心ヲ協ヘ力ヲ戮セ私ヲ忘レ公ニ奉シ以テ朕カ志ヲ弼成シ朕ヲシテ祖宗作述ノ遺烈ヲ揚ケ以テ祖宗神靈ノ降鑒ニ對フルコトヲ得シメヨ

道風德香

大僧正本多日生

二

本日は「道風德香」と題して、佛さまの尊い意味合をお話したいと思ふ。

今日の社會はいろいろ議論葛藤の世の中であつて面白い議論が多いやうであるが、さまざまの議論を闘はし、意見を交へてやつて居る間に、全体として次第々々に世の中が悪くなるやうに思はれるのである。畢竟するにいろいろの學説や意見といふやうなものは、綜合して世の中を善くするために在るべきものだといふその前提是、甚だ漠然として居るやうであるけれども最も強いことであらうと思ふ。いろ／＼理窟はあつても、結局そんな事をゴテ／＼と言ふたり騒いだりするためにはだん／＼世の中が悪くなるといふことであつたならば、それ等の理窟や議

論の總体を纏めて考へたときに、サツバリ價値が無くなつてしまふ譯である。
茲に於て翻つて佛教を觀ると、佛教の方ではあまりに面白い理窟は尙ほないのであるけれども、假にも佛さまに近より、佛さまの教に基づくといふことになれば、其の解説よりしてその人が善くなり、又世の中が善くなり、事實上すべてが善化して行くところの效能が現はれて來るのである。して見ると佛教の感化影響といふものは非常に大事なものであつて、區々たる議論學説を超越して佛さまの有難いこと、佛の教の尊いことを人々が心から考へて行つた方が、事實に於て此の世の中を善化し、平和にするといふ效能があるやうに思はれるのである。

佛教の中には、チャウドさういふ意味合が根本の思想として教へられて居るやうに思ふ。それは佛様が相をお現しになることも、その上に教を説かれるこども、一切の行動を總括めて根本は佛様の大慈大悲より出て居る。

慈悲身口に薰じて二身の應現と二鼓の宣揚ありと申して、いろ／＼に身を現し給ふのもいろ／＼の法を説き給ふのも、其の根本は佛様の大慈大悲の御心のはたらきから出て居るのであるから、その佛の御相、その佛の御聲を總括めて、御身の全体も、御話の全体も皆それが大慈大悲の結晶であり、大慈大悲の表現であること故に、部分々々を斷つて考へれば假に議論の餘地があるとしても、その全体を總括して觀察するときには、人心を和らげ、人心を導き、人心を向上せしむるどころの力が其の中から現はれて來るのである。其の反對に、チヨット聞けば道理のやうであり、いろ／＼理窟にかなつたやうであつ

ても、出發点が濁つた考から組立てられた學説や議論であつて見るに、だん／＼やつて居る間に其の根本の悪い觀念、悪い思想が影響を與へて來て、ガチヤ／＼やりつゝ結局は仕方のないものが出來て來るのではないか。即ち佛の德風よりして世の中を感化すれば善良なる社會となり、惡魔の側から魔風を吹き捲つて世の中に騒動を起せば、一舉一動がみな結局惡魔のためにしてやられるといふ事になるのである。

天台大師が佛教の發心信仰をいろ／＼に分けられた中に「佛の勝相を緣じて發心する者あり」といつて、別段説教を聞かないでも、佛様の尊い御相を拜しただけで其の德風に化せられて信仰に入る者が澤山あつた。又佛の音聲を聞いて——其の話の内容の意義、理解といふことでなくとも、其の御聲を聞いただけでそれに依つて化せられた者が澤山あつた。これは梵音聲相の利益として現はれて居るのである。

が、佛様にはさういふやうな御力用がだん／＼細かく算へれば三十二相八十種好といつて非常に澤山ある、或は眉間白毫の光を放ちたまふ其の光明に觸れて信仰に入る者あり、或は青蓮の御眼といつて非常な優しい御眼を拜してそれで信仰に入る者があるといふ風に、如來の勝相を縁じて發心信仰をした者が澤山あると天台大師も申して居る。

それは唯だ佛様が美しい、御相が勝れて居るといふだけではない、其の根本に戻れば佛様の御覺り、佛様の御慈悲の輝きが其の相の上に顯はれて來て居るのである。即ち「示して丈六紫金の暉と爲る」と經文に説かれる如く、非常な深い功德之力、善業の力、正覺の力といふものが内在して居つて、それが顯現されたものが佛様の美しき相となつて居るのであるから、その容貌に一種の電力を有つて居られると言つて可い譯である。モウ一目拜しただけで人々の心が引つけられる、惡心ありし者は惡心を捨てゝ善

よいといふことになるからして、如來の勝相に對してそれだけの感化を受けるといふことも當然あり得べき事なのである。

それであるから佛様の教の全体を通じて、又御活動の全体を通じて、釋尊が此の世に出られた結果としては、人間の世の中に廣大無邊の影響を與へて、大体は人間の悪くなつて行くのを嘗止め、墮込んで行くのを先づ堕落せんやうにするといふやうな、大きな力が佛様の上から現はれて來て居るものである。人間はさういふ偉大な外部の力に觸れなければなか／＼善くなれないものである、例へば人間の惑漏する精神、貪婪の精神といふやうなものを戒めるに、唯だ「そんな事に溺れてはいけない……そんなに慾をかいてはいけない」と言つても、同じ程度の者が忠告を與へたのではどうも其の效能が無い。けれども釋迦如來が彼の迦毘羅衛城の太子として身を現じ給うて、先づ普通の人間ならば其の享樂の内に

心になり、散乱の心は鎮まつて沈着の心になり、鬭争の心は鎮まつて平和な心になるといふ風にして、人間の悪い者が除かれて行くのである。

それは恰も人間が美しき自然の事象に觸れてもさういふ感化を受けるもので、月を觀、花を見、風景をみるにつけて、人間の人格といふものは善良化して行くのである。今日の不良少年などを感化するに就ても、自然に近づかしめて、或は花卉を造り、或は自然の風光に接せしむる間にだん／＼邪念が消え去つて純潔なる人間に復つて来るといふことは明に實驗されて居る事柄である。既に自然の美に於てさういふ力がある以上に、人格の美に於て更に偉大なる力があつて、自然の風光に觸れるよりも尚ほ痛切なる觀喜なり感想が浮ぶやうになれば、月を觀て人間が氣分がよいといふ以上に、佛様の白毫の光に觸れば一層心持がよい、花の咲いて居るのを見るよりも佛様の慈悲の御眼を拜するときの方が感じが

漏れて行くべき太子の生活を擲つて、夜半に王城を脱け出でて、今まで澤山の召使があり、ナニ不自由の無かつた宮殿の生活を捨てゝ山の中に入つて、樹の下に草を敷いてお坐りになり、誰も給仕奉公する者も無いといふやうな實に生活の激變を示して、而も平然として、精神の喜悅に生きる者、希望の光に生きる者は、人生の物質のさういふ欲望を離れて見るといふと、無論その通りには行かんでも、さういふ側もあるものだといふ事は痛切に感じられる——大きな歎喜に生きて行けるといふ事實を示され「吾々は凡夫として實に淺ましい生活をして居つた佛様のなされた事を考へて見れば、サウ一から十まで惑漏の夢を貪るべきものではない」といふ反省が起つて、百分の一なり千分の一なり其の如來の尊き思召の意味を感受することが出来る譯である。それはさういふ尊い事實力強い事柄を以て吾々を導き給

うたからであつて、即ち釋尊はみづから「我は開道者なり」と言はれた。その事實を開いてさうして教導を與へるものである、決してたゞ「說道者」といふ口で說法するだけのものではない、身を以て範を垂れて汝等を導くものであると言はれる、その佛様の強き感化力といふものが人生を善良化して行つたものである。

であるから教の内容に入らないでも、釋迦牟尼といふ人格者が出現したといふその一つの事實が、人類の歴史に多大な影響を與へたものである。それが何時、如何なる場合に於ても、佛様は尊き手本として我等を導かれた、それを少しく分解して考へて見ればます／＼能く判つて來る譯であるが、例へば普通の人間は、僅かな事にでも腹を立てゝ殺伐なる氣風が動くものである。「彼奴がこん事をしやがつた、こつちにも料簡があるぞ……己れツ承知がなるものか、叩き斬つてしまふ……」といふやうな譯で

隨分兎暴なる罪悪を犯すに至るのであるが、佛様はそのやうな普通人が瞋恚に驅られて、「彼奴を殺されれば腹が癒えぬ……」といふやうな態度に出る場合でも、その反對に柔和忍辱の心を以て其の者に對して居られる。彼の阿闍世王が佛に對して害心を懷いて、表面には佛を御招待申して置いて、そこに荒くれた象に酒を飲ませて其の醉象に佛を踏み殺された象に酒を飲ませて其の醉象に佛を踏み殺されようとした事がある。或は又提婆達多が象頭山の上から大きな岩を投げ落して、その麓を通る佛様を屢々殺さうとした事もある。阿闍世王といひ提婆達多といひ、全く恐ろしい、己れを殺害せんとするところの敵であるけれども、其の敵に對された釋尊の態度はどうであつたか。普通の人間ならば怨み骨髓に徹すといふ譯で、一步を誤れば醉象に踏み殺される大きな岩石に壓し潰されるといふ危険に遭遇したのであるから、衷心より瞋瞋を以て向はれる筈であるけれども、佛はチャウド其の正反対の態度を示され

やうに、「向ふの出方がサウなら此方も斯うだ……」といふやうな、復讐的の殺伐な觀念をもたないやうになつて行くのである。

それは彼の玄奘三藏が天笠に法を求めるに行かれる途中で山賊に出会はれた時の話も、よくその意味を現はして居る。山賊がすべての物を奪ひ去つて、とう／＼着て居る着物まで剥ぎ取つてしまつた、そこで玄奘三藏は非常に泣かれた、すると山賊が言ふには、「貴様は見かけに寄らぬ卑怯者だ、國王の歸依を受けた異域に法を求める位の沙門ともある者が、山賊ぐらゐに出会つたからといつて泣くナンといふのは、貴様はサテは僞者で、あつたかといつて、たいへん嘲笑つた。その時に玄奘三藏が言はれるには「ナニも自分はお前達に裸にされた事に就いて泣いて居る譯ではない、此の涙は却つて汝の爲めに流す涙である、汝が今これ等の財物を盗んで行つたところが、それは一時の亭樂のために直に使ひ果してしま

ふであらう、喜びや楽しみは一時であるが、求法沙門の財を奪ひ、苦みを與へた罪は容易に滅びないぞ、電光朝露の此身の爲めに、なんぞ阿僧祇長夜の苦因を作らんや——電のビカリと光る間にも等しい短き人生の一時の享樂のために、永遠の沈論苦惱を招き來すといふのは、實に考の足らぬ可哀相な奴だと思へば、涙おさへがたなき譯であるぞ」と言はれた。

古來の高僧碩徳の心懸として、大なり小なりみなさういふ考を有つて居られたものである。

日蓮聖人が松葉ヶ谷に於て焼打をされて、少輔房といふ者のために、自分の懷中せる法華經の巻物を以て頭を打たれ給うた時にも、一たびは巻物を奪ひ返してあべこべに殴りつけやらうかと思つたけれども、待て暫し、佛の弟子たる者はさういふ風な行き方をすべきものではない。法華經の行者が法難に遇ふべしと說かれて居るのも法華經の五の卷であるいま少輔房が日蓮を打たんとして振り上げて居る經

卷も第五の卷ではないか、實に不思議な事だ、これは正しく日蓮の法華經の行者たることを證明して呉れるものであるさうして、見れば少輔房は我が善知識であると言つて、却つて感謝せられたことが御遺文の中に出て居る。

斯ういふ態度——普通ならば拳骨を振上げたり、足で蹴飛したりする所を、歎喜の心を以て迎へ、憎むべき者を救はんとするやうな精神を有得るといふのは、是は宗教を指いて外には求められない行き方である。世間の道徳ではそこまでは説き切れない道徳の教ゆる所は精々「まあ／＼勘忍してやれ……」といふ位の事であるが、宗教は譬に報ゆるに慈悲を以てし、敵に對するに救ひを以てするといふ此の考へ方は、大聖釋迦牟尼が前に申す提婆達多や阿闍世王といふやうな兇暴なる敵に對して執られたところの態度が、吾々人間の教を成したものであると謂はなければならぬのである」それは實に偉大なる

感化の力である、その影響がだん／＼稀薄にはなつて行くけれども、情の剛い嫁や、性の悪い姑婆さんの喧嘩の上にも感化を及ぼして、互に相反接するその恶心の中に、それを緩和する力として現はれて行くといふ事實は、どの位日本の社會に繰返されて居るかわからぬ譯である。

その影響が人生に與へて行く幸福および人生を善良化して行く力といふものは實に測り知るべからざるものである。今日でも日本の農村などに行つてそこに相當なる道徳が行はれ、善良なる風俗習慣が作られて居るその大部分は、やはり佛教の感化から起つたものであると謂ふことが出来る。それは朝鮮あたりも昔は佛教のさかな國であつたけれども、日本人とはよほど變つて居る。佛教は寧ろ日本よりも徹底的に尊崇したのであるけれども、佛教を絶對

に否認したる結果として現はれて居る今の朝鮮人の生活、隨つて彼等の家庭、彼等の社會そこに流れる居る風俗習慣、一般の状態といふものは、日本とはよほど違ふのである。

して見ると今の日本の美風特長、彼等に勝るところのものは、決して儒教の感化から來たものではない。また自然に日本民族が優秀だから斯うなつたといふ譯でもない。寧ろ或る時代には朝鮮民族の方が日本人よりも優秀であつたといふ事が言へるのである、それが今日その地位を顛倒して居るといふのは、やはり文教の衰頹が其の民族の人格の上にも消長して來るものである。現に日本人が今所ではだん／＼悪くなりつゝある、日本民族なるが故に放任して置いても善き者になるナンといふことは、とても言へるものではない。こんな調子で行つたならば五十年さきにはどうなるかわからぬ、本年の御即位禮の行幸啓に就ての御警衛の嚴重な有様を考へて見

ても、だん／＼あれば嚴重になつて行つたならばどうなるか、大正天皇の御即位の時と今回とを考へて將來この速度を以て進んで行つたならばと、考へて見ると教の衰微といふものは非常な恐ろしい結果を招來するものである。

それ故に日本の農村あたりに善良なる風習の遺つて居るといふ事の由つて来る所は、大部分佛教的感化の影響である。衰へたとはいつもまだ／＼田舎の至る處にお寺があつて、たまには説教も聞いたり坊さんも亦少しの話はする、お寺詣りをして佛様の事も考へたり、わからぬながらもお經の聲が耳に入れる、何のことだか知らんけれども「爾世尊從三昧……チャーン」……ハテナといふ事ぐらゐは響くものである。さうすると其のチャーンといふ音は何でもない、詰らぬことのやうであるけれども、その根源は前に申す佛様の絶對の大慈大悲から流れて来て居るから、そこに人心に感動を與へる廣大無邊の力

があつて、ビンと頭脳に響くのである。殆んど人間の世の中はそれで保つて居るのである、それは實に偉大なものである、誰が何と言つても、お經の聲などは詰らぬと言ふ人もあるけれども、詰らぬと言ひながらやはり讀經の聲を開けば、藝者の端唄を聞くやうな心持では居られない、「ナニを坊主がクシャ／＼言ひ居るか」と表面では輕蔑しても、その人の誠心にはお經の調子がビンと響いて、何處かに所謂道風德香その人の人格を薰化せんば止まぬといふ力があるのである。それは大きな事實である、甚だボンヤリしたやうに見えるけれども、それを除つてしまつたらモウ日本などは一遍に世の中は頗れてしまふものだと思はれる。西洋でも基督教の力が衰へたと非難されて居るけれども、まだ／＼日曜日には教會に集まつて禮拜を行つたり、いろ／＼宗教的事をやつて居ることに依つて、相當に社會の安寧平和を維持して居るので、それがスツカリ無くなつた

いふ順序になる。だから兎に角佛教を興隆して、あらゆる家庭に社會に其の感化を旺盛ならしむれば、そんな細かい理窟などを教へなくとも、ズソと殺伐の氣風を抑制して社會を柔和にするといふ效能は實に偉大なものであるといふことが判るのである。又たゞ殺伐の方面ばかりではない、現代は各方面ともに非常に不安の精神に襲はれて居る。生活上の不安もあれば、道德上の不安もあり、あらゆる事がみな不安である。生活の上に就ても「斯う面倒になつて來ては困る、一体どうなるのかといふことは貧乏人も金持も考へて居る、地主にも小作人にも、資本家にも労働者にも、みな各々不安がある。政治上の事に就ても「一体これでどういふ事になるのだろう……良い工合に行き居るのだらうか……」といふ事は、相當立派な人がみな考へて居る。「先生如何です、政治はうまく行き居るのでせうか、日本はこれまで安心でせうか」……といふ質問は、なか／＼有

きよしつんである。ちよつと答辯に困る譯である。
 「まあそんなに心配するな」……とは言へない「御尤もです、實に心配に堪へません」と言はなければならぬ状態である。教育の側に就て見ても、學校は澤山出來て教育は盛んであるけれども、學生の中にもストライキをやつたり、或は共産黨の仲間などに入つて兇暴な運動の手先になつて居る者も少くない。これで、日本の教育はうまく行き居るのでせうか……」と問はれたならば、「どうも困つたものだ……」と言はなければならぬ、どんな文部大臣が出て来ても之に對して立派な答辯は出来ない。さういふ譯であらゆる方面がみな行詰つて居る、考へて見れば實に憐れな状態になつて居るのである。

其の行詰つた問題の裏面にはみな不安といふものが併つて居る。教育が工合よく行かないから、隨つて自分の大事な子供もうまく育てることが出来ないといふことになつて来る。現に名古屋で最近私は相談を受けた事がある、それは相當な官吏であるがたつた一人しか無い男の子が中學二年生であるけれども、不良少年の仲間に引摺り込まれてしまつてしまひます、どうしたら宜しうございませうかといつて相談に來られた。いくら相談に來られてもどうも此方にも名案がない「さうなつては仕方がない、もうそんな事をしては不名誉になりますから……」「今更そんな事を言うて居つても追つかぬから、警察の方と協力しておやりになつたらどうです」と私は返事をしたやうな事である。左様な次第で實に人生は各方面に不安の氣が漲つて居る。今回の御大典に就て斯の如き御警衛を要するといふのも、やはり或る意味の不安である。國際關係に於ても表面は平和の風が吹いて居るやうであるが、内實は各國ともに不安が絶えない。日支の交渉も不安……といふ

譯である。

併しこの不安といふものも、一々本當に解決され行けば結構だけれども、よく考へて見れば人生といふものは始めから終ひまで不安の綱渡りである。第一に自分の命といふものが根本に於て不安ナシである、人間は一体いくつまで生きて居られるかそれは保証が出来ない「せめて女房は自分が死ぬまで死なずに居つて貰いたい」……と言つて見ても、

それも判らぬ譯である。だから押詰めて考へて見れば何も彼もみな不安なのである。蚯蚓がお釋迦様の所に來て、私はどうして生きたら宜しうございますか」と尋ねた、お前は土を食つて生きたら宜からう」と仰しやると「土が無くなつたらどうします」と尋ねた「土はお前がいくら食つても無くなりはせぬ」無くなりはせぬと仰しやつても、それでも無くなつたらどうしませう「それは仕方がない、土が愈々無くなつたら死んだら宜からう」と言はれた。さ

うすると其の蚯蚓が神經衰弱になつて「これは大變だ、斯うして俺達の仲間がみんな土を食つて生きる、きつと土が無くなつてしまふだらう、お釋迦様も土が無くなつたら死ぬより仕方がないと言はれた、無くならぬ内に早く何とかしなければならない」といふので、地面の上にノソ／＼這ひ出して來た、その爲めに日の光に照されてコロ／＼と死んでしまつたといふ話がある。

ちやうど人間といふものも、へたに考へると此の蚯蚓みたやうなことになるのである。生活の問題でも不安だ／＼と言へば成る程不安であるけれども、これが朝鮮人の生活程度くらゐまで行くことを考へたら、まだ／＼そんなに心配することはない。朝鮮人の家庭へ行つて見たならば、家の内には鍋が一つ、プランとぶら下つて居るきりで、蒲團もなければ、お膳もなければ、筆筒もなければ何も無い、着て居る物はといへば襦袢一枚きりで、着のみ着の儘であ

る、誰も彼もみなその通りである。さうして山には木が一本もない、道路は一つも附いて居ない、村から村へ行く里道すら無い、荷車もなければ自転車も無い、無論電氣などは何處にも點いて居ない。河には提防が無い、山には木が無いといふ譯であるから、あゝいふ状態にまでなることを考へれば、まだ日本人が五十年やそこらは遊んで食つて居つても行かれる。だからまた前途の事をいろ／＼心配してやるもの宜いけれども、サウ神經や、みのやうに心配ばかりして、どうなるだらう／＼と言つて居つても仕方がないから、適當に考慮をすれば宜い。それと同時に一方には、何時死んでも宜いといふ安心を人間は有たなければいかぬ、何時どんな事が出来て命を喪ふかわからない。地震がモウ搖らないかといへば、サウはいかない、また學者は百年くらゐは大丈夫だと言ふけれども、百年といふことがどうして保證が出来るか、そんな事はあてにはならぬ、一つ間

教に依るのが宜しいのである。佛教の信仰を得ればどのやうな激しい變化に出會うても驚きを取らない即刻只今自分が息を引取つても、満足の笑を以て終りを告げることが出来る、天地が一時に晦冥の巷となつても駭かないといふ大安心を與へられるのであるから、其の上に一切の動作をやつて行かなればならぬ。佛様はその事を能く教へられて居る。それは「いろは」歌にも現はれて居るが如くに、變化する方から見れば「わが世たれぞ常ならむ」であるが併し「有爲の奥山けふ越え」れば、如何なる人間にもそこに安住の地點といふものがあるのである。その有爲の奥山を越えるには、我が來つて信念を決定さへしたら、如何なる境遇事情に置かれた者でもそこに安全地帯といふものがチャンである譯である。チャウド東京の須田町なら須田町の電車の交叉點に立つて見ると、無横縫盡に自動車や電車が走つて居る、なか／＼危なくて横切ることが出来ない田

遠へば一年に二度でも三度でもやつて来る譯である。さういふ風に考へて見ると、人生そのものが釋尊の言はれる通り、一方から言へば生死無常、有爲轉變のものであつて、一として吾々人間の世の中に確乎たる基礎といふものは無い、無いといへば自分の命からして定めのないものである。併ながら其の程に或る安立を得て、そこに精神の沈着を定めて行かなければならぬであるから、其の有爲轉變の程に一方には信仰の力に依つて精神の安住を與へ、他面には人生に處して適當なる活動をして行くといふ事にするより仕方のないものである。それを徒に焦慮つて「サア何が不安ぢや、かにが不安ぢや、早くやれ、確かりやれ……」と言つて急き立てれば、誰も彼もみなキヨト／＼して神經衰弱になつてしまふ。

およそ物事を改良して行くにも、モツと沈着いた考を以つてやらなければいかぬと思ふ、それには佛

舍者はウロ／＼して其の中に迷ひ込んでしまふから、サア進むことも出来ず退くことも出来なくなつてしまふ。所が馴れた人はその難音の巷に安全地帯といふ少し高く盛上げてある所を發見して、そこで平然として巻煙草を吸うて居るのである。

さういふ風に人生に處するには、一面は非常に危ないものであるけれども、又自分の立場を据ゑればそこに安らかな所がある、これを能く知つて世に處して行かなければならぬ。その人生の不安の巷に安住地點を與へるものは即ち佛教であつて、この位立派な教はない、どんな不安の者にも安心を與へることが出来る譯である。だから一切經の中にはさういふ不安の實例を擧げて、それを安らかに慰め導かれた例が澤山擧げられて居る、たつた一人しかないと云ふ出來る譯である。だから一切經の中にはさう子供を喪うて狂氣になつた女が、釋尊の德風に化せられた本心に後り、喜んで正しき信念に入つたといふ例もある。或は連添ふ良人を喪うて頼りなき女が

信仰に入つて、却つて強き力を得て生活を營んだといふ者も澤山ある。多くの尼僧といふやうなものは殆ど悉くがそれであつたのである。その他いろいろ人生の不遇に出會ひ、逆境に立つて居る者がいづれも佛教の信仰に依つて勇往邁進の力を得たのである。およそ佛教の信仰に來つた人の全部は、さういふ風な不安の境遇を経て安住地点に達した人といつて宜いのである。であるからこれ位世の中に力のあるものはない。其の不安を去つて安住を得せしむることが人を教ふといふことである。

又モウ一つ考へれば、人間は極めて利己心の強いもので、大抵の學問や議論といふものも皆これを自己の方に引つけてしまふ。先づ今日の法立經濟その他の事柄はみな利己的に應用されて居るのである。法立もつまり個人の權利を保障するといふやうなことで、みな個人の利益を中心にして考へられて居る。經濟學でやかましく言ふ私有權といふことも、

無論個人が利己心の全部を拠棄するといふことは容易に出來ぬけれども、これを緩和するといふことは無かるべからざる事である。又それは爲し能ふことでもあるのである。併しそれが通常の人間では出来ない、似たり寄つたりの者が忠告をして、お前そんなに慾をかいてはいかんぢやないか』『ナニ? さういふお前はどうだ、お手許拜見……』とやられる險惡な兆候を呈出して居るのである。

人間は大事なことに反省をするとせないといふことが大きな問題ナンである。反省さへすればどんな人間でも相當に使へるものである、どんな酒のみの呑だれでもそこに反省心があつて、「オイあんまり大きな聲を出すな」と言はれて「なる程」と聲が高うございました、氣をつけますといつて、それから小さい聲で物を言ふやうならば宜いのである。それを少しも反省しないで「ナニツ、聲が高い? 大きな聲は地聲ダイ……」と言つて威張りちらすやうでは駄目である。人間はどうせサウ完全なものではないから、調子の外れる事はあるけれども、それを人から言うて聞かされた時に「成る程……」と一つ反省をすればだんく向上して行けるし、そこを反省しないで我を押通すとなればモウ向上の望の無いものである。それが言うて呉れる人に依つて、反省をする、せぬといふことがある、「偉い人が言うて呉れなるなら反省もするけれども、お前等がいくら言うた

て頭を搔いて引下るといふのでは、少しも效能はない。『お手許拜見……』と來たときに、「坐せよ、大いに語らん」といふだけの資格のあるものでなければならぬ、それが釋尊である。釋尊から一言いはれたならばビリツと應へるのである、お歎も我が身を可愛がるのは宜いけれども、下手に可愛がると、牛が自分の尻尾を舐つてそこから腐れが入つて死んで行くやうなものぢや、蠶が自分の身が可愛いとと思つて幾重にも身を包むために、沸湯の中に抛り込まれてしまふやうなものぢや、人間もむやみに自分を保護するといつて自分ばかり可愛がつて居ると、知らぬ内に湯の中へ抛り込まれた蘊みたやうな事になるぞ……斯う釋尊から言はれると「成る程さうだ」と反省の心がおこる。それが普通の人間同志の話であると「馬鹿なことを言へ、貴様うまい事を言うて俺をだますつもりだナ」……といふことになつてなか／＼反省をしない。

人間は大事なことに反省をするとせないといふことが大きな問題ナンである。反省さへすればどんな人間でも相當に使へるものである、どんな酒のみの呑だれでもそこに反省心があつて、「オイあんまり大きな聲を出すな」と言はれて「なる程」と聲が高うございました、氣をつけますといつて、それから小さい聲で物を言ふやうならば宜いのである。それを少しも反省しないで「ナニツ、聲が高い? 大きな聲は地聲ダイ……」と言つて威張りちらすやうでは駄目である。人間はどうせサウ完全なものではないから、調子の外れる事はあるけれども、それを人から言うて聞かされた時に「成る程……」と一つ反省をすればだんく向上して行けるし、そこを反省しないで我を押通すとなればモウ向上の望の無いものである。それが言うて呉れる人に依つて、反省をする、せぬといふことがある、「偉い人が言うて呉れなるなら反省もするけれども、お前等がいくら言うた

つてそんな事を聞くものかい」……といふことになる。その代りに本當の權威ある人から言はれれば、「どうも他の者の言ふ事なら聞くのではありませんけれども、貴方に言はれては致し方がありません」……といふ風に聞む譯ぢや。其の間ませるだけの強大な力を有つた人が世の中にあるといふことは、實に人類に取つて非常に慶ばしい事ナンである。それが耶ちお釋迦様の偉大な力である。「俺が意見をしてやらう」と言はれるのである。阿闍世王のやうな兇暴な者でも、提婆達多のやうな惡人でも、どんな者でも釋尊のために説き諭されば反省をして、其の己心といふものを緩和して来る、それが實に大きな力である。

現代のやうにいくら學問や理窟を捏ね廻して、法律ちや、經濟ちやとやつたところが、此の人間の利己心を感退し、我慾心を緩和することが出来ない限りには、あの理窟は無駄ものではないか。何とか

カンとか道理らしい事を言うても、結局は自分に都合の好いやうにそれを解釋して行かうと皆が考へて居る以上は、猫がお互に爪を隠して居る以上は、表面上は笑つて居るけれども隙があつたら引摺いでやらうといふ者はばかりが寄り合つて居る以上は、到底人生はうまく行きさうな筈がない。先づ以て人間の心の内面に於て利己心を緩和して、寧ろ利他の精神をさかんにして、「己れ達せんと欲すれば先づ人を達せしめよ」といふ風にならなければ駄目である。社會を善くして置かなければ、自分の家庭ばかり如意で悪くなれば、いくら自分ばかり悪い事をしないで幸福を享けようと思つても、到る處に不愉快な事が現はれて来るのであるから、大きく考へればやはり他と共に進んで行かなければならぬ、眞の幸福はやはり全体と一致して行く譯のものである。恰も船

に大勢の者が一緒に乗つて居るやうなものだから、その船の中で一方には腹が空つて餓死しさうな者があつたり、頭を吊る者があつたり、狂人になつてど、なりちらすやうな者があつたりしたならば、同船の者は皆悉く不愉快になつてしまふ。自分ばかり酒を飲んだり、鮓を食つたりして居つてもこつちでは爺さんが頸を吊りかけて居る、こつちでは女の狂人が嘆きちらして居る、さうかと思ふと出刃庖丁を振り廻す奴があるといふことになつたら、落着いて鮓を食つて居る譯にはいかぬではないか。

現代の日本はチャウドさういふ風になつて行き居る、少し範圍が廣いものだから眼に入りにくいけれどもこれが、近く寄つて來たら、朝起きて飯を食はうと思ふと、こつちには鐵道で轟き殺された者がある、こつちでは出刃庖丁を振り廻すといふやうな出來事が一パイあるのである。毎日の新聞に現はれる光景

といふものは其の通りである。新聞に出て来るやうな事柄は少し遠く離れて居るものだから、さういふ嫌な事が自分の周囲には無いやうだけれども、コレを自分の傍に引寄せて來たならばなかなかえらい事である。此の頃ラヂオで警視廳の公示事項として、今日は何處に投身者がありました、今日は斯ういふ所に自殺者がありましたといふやうな事を知らせて居る、あれを聞いて居ると實に毎日々々嫌な事、惨たらしい事で満ちて居る。ラヂオで聞くだけだから痛切に感じないやうだけれども、若しあれが自分の家族の中に起るとか、親類の間に出来るとかして、眼の前に見せつけられたならば、とても夕飯などを食つて居られるものではない。

さういふ風に社會が不安の状態になつて來た時に於ては、聞く事見る事が嫌な事が多くなつて來るのであるから、自分が幸福を享けるといふことは出来るものではない。やはり眞正の幸福は世と共に

進んで行くのであるから、所謂共存共榮である、自分のみ單り達するといふことは出来ない。そこで廣く他を利する精神を有たなければならぬ。勿論他ばかり利して自分を捨ててしまふといふことは、人間になか／＼出来ない事であるから、自利利他、即ち人も利し己れも利する、我、汝と共に幸福を享けんといふことになる、ソレが釋尊の教へられた主義である。法華經を見てもわかる、「皆俱成佛道」とあつて、我等と衆生ど皆俱に佛道を成せんといふことになつて居る。即ち自他兼濟といつて、自分も他人も兼ね済ふといふことが佛教の教になつて居るのである。

さういふ教化が事實に釋尊に依つて與へられて來た、それが非常な強い力を以て佛教徒の間に宣傳せられたから、假にも佛教を信じたといつたならば、直にさういふ廣い精神を起すのである。第一にお寺などに参詣してお賽錢を上げるといふこともさうである。

志である。ソレから進んではいろ／＼の功德善根を積んで行かうといふことになる、或は寺院を建てようとする者もあり、或は法を弘める助勢をする者もあり、或は社會事業のために、或は世の公利公益のために、さういふ他に對する道德精神といふものが燃え立つて来る譯である。

それは佛教歴史を通じて釋尊の感化から起つた事は廣大無邊のものである。モウ釋尊の世にござる時分から長者は施行といふことを志して居る、釋尊に歸依した須達長者とか阿那邠邸長者とかいろ／＼長者の信者があるが、なか／＼立派な仕事をして居る。それがお經の中に遺つて居ることに於て、皆後代に傳つて來るのである。いま佛教各宗で放生會ナンといふことをやるが、或は鯉を池に放したり、鳩を籠の中へ入れて行つて放したりするやうな事でも生けるものを救つてやるといふ、人間として優しい考のことである、さういふやうな美しい精神

ある、他の所では人間は黙つて錢を捨てたりするやうな事は何處にもありはない、それどころではない落ちて居る錢さへ拾はう拾はふと考へて居る、それが佛教の信仰に依つて參詣をすれば、どんな客畜な者でも「オイお賽錢を二錢出しな……三錢出しな……」と言つて捨てゝ行くのである。人間が要求されずして錢を捨てるといふことは、非常に大きな事實である。淺草の觀音などに行けば大きな賽錢箱があつて、それを毎日あけなければならぬほどガラ／＼捨てゝ行き居る。それから又僧侶に對するお布施といふものもさうである、いくら包んで構はない、五十錢でも三十錢でも、十錢の白銅一つ包んで置いて行つても、別に怒ることは出来ない譯である併し「まあ一圓包んで置かう……五圓包んで置かう……」といふことになる。これも要求されずして金を包んで出すといふことは、なか／＼えらい事である、やはり佛教の感化に導かれた淨い精神、立派な

もみな釋尊の優しい感化の裡から生れて出て來たものである。他の教化からは決してさういふ事は起るものではない。淺草觀音の境内へ行つても、不忍池に行つても、澤山の石龜とか或は耕鯉とかいふものが放たれて棲息して居る、それを見るのは誠に心持の良いことである。先づ此の頃の風潮として見れば鯉などは獲つて食つてしまはう、他人の池の中に居るのでも盗んで來ようといふ世の中に、自分が錢を出してさういふ生き物を放してやるといふ、そこには人心を和げる力は廣大無邊なものである。それは唯だ鯉や鳩を放すといふやうな事ばかりではない、人間の精神に、さういふ仁禽獸に及ぶといふやうな聖人に等しき行為が易々と出来るやうにしたといふ佛教の感化は廣大無邊なものである。

人間の精神が悪化するといふのは、其の原因は僅かな事からだんに／＼悪くなつて行くのである。小さい子供の時分に蜻蛉の尻をひつ切つたり、蛙を石

にぶつけたり、甲蟲を踏みにじつたりするやうな事を平氣で放任して置くと、だん／＼に殘忍性といふものが發達して終ひには人殺もするといふ事になる。それは今日の心理學の上に於て明に証明されて居ることである。ところが佛教の感化の行はれて居ない所では、甲蟲を踏み殺したりする位の事は何とも思つて居ない。近來の學校教育を受けた人は、随分やさしい綺麗な顔をした奥さんでも、子供が蜻蛉の尻などを引切つても平氣で見て居る、「まあ面白いネ……モツと引切つておやり……」といふやうな譯である。吾々は小さい時分から佛教の感化を受けて居るものだから、さういふ優しい顔をして女の人が蜻蛉の尻を引切つたり、甲蟲などを道路のコンクリートの上に投つけたりするのを見ると、實に恐ろしい事をする、鬼みたやうな人だと思ふ。併し佛教の感化を受けない者から見たらそんな事は何でもないと思ふであらう、今日の教育上から言つたならば、弱化を産み出していくのである。

蛇の尻を引切つたり、甲蟲などを道路のコンクリートの上に投つけたりするのを見ると、實に恐ろしい事が非常によく出来るのである。要するに釋尊の道風德香といふものは、其の尊い御徳が釋尊の一舉一動の上にあらはれて、さうして此の人生を感化して來た力が多大なものであると思ふ。

即ち穀伏に代るに柔和の心を以てし、不安に代るに安心立命を以てし、利己心に代るに自他兼濟の精神を以てするといふやうになつて、ズツと此の社會を善良化して行くことが出来るのである。要するに釋尊の道風德香といふものは、其の尊い御徳が釋尊の一舉一動の上にあらはれて、さうして此の人生を感化して來た力が多大なものであると思ふ。

なほ其の教の内容に入つて見れば、モウぞの一端に觸れても實に尊い御徳であつて、感澈に堪へないものである。前にも、佛の御聲が美しくいために、その内容はわからぬでも感澈されるといふことを申したが、少し進んで其の教の意味合を了解するならば、更にモウ一段と尊き感化を更ける譯である。阿含經の中に、當時印度の婆羅門の輩が毎朝起きた時に六方を禮拜するといふ事をやつて居るのに對して釋尊が其の禮拜に内容の深い意味合を教へられたといふ話があるが、道德上に關する釋尊のお考を窺ふ

肉強食、優勝劣敗といふことを主張して居るのだから、人間が蛙を殺したりモルモットを殺したりすれば、動物をも愛護するといふ精神に立てば、それがいろ／＼人間の優しい精神を産み出す根本になつて來るのである。此の頃京都で或る醫者が、今までモルモットなどを澤山殺して済まなかつた、可哀相で仕方がないといふので、とう／＼頭を剃つて坊さんになつた人があつたといふ事であるが、これは我がいろ／＼人間の優しい精神を産み出して來るのである。

斯様にして算ふれば、現代を毒するところの殺伐なる氣象とか、或は不安の精神とか、或は利己心の欲望とかいふやうな、さういふ世の中を悪くして行く力が、佛教の感化一つでだん／＼に薄められて行つて、それに代るところの善き精神を産んで來る、

式は婆羅門の儀で、これに内容を與へられたのである釋尊の教化の出發点たる阿含に於て左様な話をなさる時分にも、釋尊はこれ位人間を道徳的に導く思想に富んで居られたか、あらゆる事の考察に於て徳風に満ちて居つたかといふことを窺ふことが出来る世間には、佛教の信心といへば個人主義だと、たゞお有難主義だとかいふ風に誤解して居る人もあるけれども、決してそんなものではない、釋尊のお考の中にはモウ立派な思想、善い精神が一パイ満ちて居つたといふことを立證するために、この事を御紹介しようと思ふ。

それは中阿含經(十三)にも長阿含經(十)にも出て居るが、善生居士といふ者が佛様の所に來て申上げるには、釋迦如來の教の方にも六方禮拜といふ事がありますかと尋ねた。釋尊が仰しやるには、それは我が教にもある、けれども其の六方を拜む心得が違ふ、形は同じやうに頭を下げるのだけれども、

婆羅門のやうに唯だボカンとして頭を下げるのと、道徳的の考を加へて下けるとの達ひがある。其の内容を説かうといつて六方禮拜に就いて詳しく述かれた。それは先づ第一に東の方を拜む時分には、子として父母を拜さなければならぬ、人間は如何なる人でも親であり子である、六十の親爺でもイキなり親になつたのではない、やはり其の親があつたのであるから、子供があり孫がある老人でも、一面には自分の父母があつたのである。その父母の事を追憶して、東を拜む時分には子の立場としては父母を拜しなければならぬ。それには五つの事を考へて父母の御恩を忘れぬやうにしなければならぬ、第一には財産を減らさぬやうに注意しなければならぬ、父母が一生懸命に家を興し産をつくつたのであるからその財物を増益すやうにして行かねばならぬ。第二には家の仕事、商賣の事をば滞りなく處置をつけ、第三には父母のお考へになつて居る事を仕途げなければ

ればならぬ、物を欲しがつて居られるならばそれを買うて上げるし、事業を考へられて居るならば其の事業の成就を圖らなければならぬ。第四には自恣の考を以つて親の意に背いてはならない、第五には自分の有つて居る物、自分で出来る事は、どんな事でも父母の爲に致しませうと考へて東の方に頭を下げるのが、子としての心得である。又他面には自分が親の立場として子の事を考へるといふ場合に、やはり五つの事を考へなければならぬ、第一には本當に子供を可愛がつてやらなければいかぬ、子は可愛いと口ではかり言うても、肚の裡では忘れて行くやうな事をしてはいかぬ。第二に子供を可愛がるといふに就ては、不自由のないやうに必要な物は供給してやらなければならぬ。第三には子供が金に困つて知らぬ間に他所から金を借りたり、物を借りたりするやうな事のないやうに能く氣をつけてやらなければいかん。第四には年頃になつたら息には嫁を貰

つてやり、娘には良縁を探してやるといふやうに、夫婦の生活をさせてやらなければならぬ。第五には自分の儲けた金は他へ隠して置くやうな事をしないで全部子供に與へなければいけない斯ういふ風に優しい考を以て頭を下げるのが、親たる者の東を拜む心得である。

次に南方を拜むときは弟子と師匠との關係で、弟子の立場に於ては師匠を敬ふことを忘れてはいけない、それにも五つの心得がある。(一)善く恭順にお師匠様に敬ひの心を捧げ、(二)教へられた事を善く守り、(三)朝はなるべく早く起きて、(四)する仕事は間違のないやうに、(五)さうして何時もお師匠様のお悦びになるやうに努めて行かなければならぬ、又師匠の立場としては南を拜するときにやはり五つの事を考へて弟子を本當に可愛がらなければならぬ、それには(一)いろいろの技術を能く教へて、(二)なるべく速く覚えられるやうに考へてやり(三)

自分の知つて居る事は惜まないで教へ（四）その弟子が世に處して行くのに困らぬやうにしてやり、（五）なほ自分の及ばぬ所は他の良き先生を選んで導きをして貰ふやうに、斯ういふ事を考へて弟子の身の上を心配してやるのが、師匠として南を拜する心得である。

その次に西の方を拜むときは、夫と妻との關係で、先づ夫としては（一）妻を本當に可愛がつてやらなければいかん（二）それと同時に妻を侮つてはいかん（三）又女は身の飾りを欲するものであるから身分相當の着物や道具を買つてやらなければならぬ（四）さうして家の内に於ては窮屈でないやうにしてやらなければいかぬ、女は戸外へあまり出ないものであるから、家の内の事でガミ／＼叱り飛ばすやうな事をしてはいかん（五）妻の親類が訪ねて來たならば、たまに來るのだからお鮎の一つも取つてやるやうに、遠慮せずにそれだけの待遇をしてやり

なさいと言つて、妻の親類を大切にしてやらなければいかぬ、さういふ事を考へて西を拜むのが夫の心得である。それから妻の方からも夫を敬ひ順ふのに十三の事を考へよ、（一）本當に心から夫を愛し敬ひ（二）丁寧に夫に事へ（三）夫の事を善く念ひ（四）夫の作業も攝持をし、（五）召使の者なども夫の手助けになるやうに仕込んで行き（六）夫の前に坐つて居る時分には横を向かないで夫の顔を視つめて居るやうに（七）後の方からお伴をして行く時分には悦んで「妾はモウ今日は行きません」といふやうな事を言はずに「有難うございます」と言つて後から隨いて行かなければいかぬ。（八）言ふことは誠實に、嘘をつかぬやうに（九）夜少しぐらゐ夫の歸宅が晚くとも門を閉めてしまつて寝たやうな振をせぬやうに（十）夫が歸つて来れば機嫌よく悦んで迎へ（十一）床はちやんと敷いて置くやうに、歸つて來ても知らぬ顔をして「あなたは今夜は歸らぬつもりで蒲團は敷いて

ありません」などと言はずにチャンと夫を心持よく家庭に住はしめなければいかぬ。（十二）食べる物も成べく夫の好きな御馳走を揃へるやうに、自分が南瓜が好きだからといつて南瓜ばかり食はしてはいかぬ、（十三）さうして夫が尊敬して居る宗教家はやはり夫と共にこれを御供養をして「坊さんなどを招んでき来て飯を食はすのは面倒だから、あんな者を伴れて来てはいけません」といふやうな事を言つてはいかぬ。斯ういふ事が妻の心得として説かれて居る。北の方を拜む時分には主人と奉公人の關係であつて、主人はやはり五つの事を以て奉公人を可愛がらなければいかぬ、（一）あまり無理な事をさせぬやうに、力に應じた仕事をさせ（二）又食事もあまり腹がへつてはいかぬから、適當の時間に食事をさせ（三）茶などの飲物も適當に與へ（四）さうして適當の休息の時間を與へ（五）萬一病氣にでも罹つたら藥も飲ませて親切に介抱してやるといふ風にして、主人は

奉公人を愛撫することを考へなければならぬ。奉公人は又九つの事を以つて主人に仕へなければいかぬ。それは（一）働くべき時にはチャンと働き、のらくらしてはいかん、（二）仕事に掛つたならば脇目も振らぬやうに専心に作業し（三）どんな事を言つかもうとも嫌だと言つてはいかん（四）主人の前に居るときには和らいだ顔を以て向ひ（五）後からお共をする時分にはまごつかぬやうに（六）言葉は嘘を言はぬやうに（七）急ぎの用事の時にはあまり主人の傍から離れないやうに、何處へ行つた／＼と主人が探すやうな事のないやうに、氣を利かして呼ばれたら返事の出来る所に居らなければいかぬ（八）又自分が他所へ行つた時に、自家の主人は斯うだ、あゝだといつて惡口を言つてはいかぬ（九）さうして結局は主人の家の榮えて行くやうに心懸けなければならぬ、斯ういふ事が奉公人の心得であると説かれて居る。又下方を拜む時分には親友同志のことであつて、

親友は互に（一）愛敬ひ、（二）軽慢らす（三）欺詐すやうな事のないやうに、（四）又珍しい物があつたら互にこれを與へ（五）さうしてよく互に極け合つて世話をしなければならぬ、斯ういふ事をいつも忘れぬやうに、互に極け合ふといふ精神を以て下方を拜まなければならぬ。

それから上方を弃む時分には施主と沙門の關係であつて、施主が沙門を迎へるに就ては（一）門を開けて快く迎へなければならぬ（二）沙門を迎へては、「今頃何した來た、又本堂の疊替の寄附でも言ひに來たのぢやないか」といふやうな苦い顔をして見ていかぬ（三）チャンと蒲團を敷いて、サアこちらにお通り下さいと言つて待遇し（四）食事を出すのでもなるべく食べよい物を拵へて出さなければいかぬ、晝食の剩り物を食はすやうな事をしてはいかぬ（五）さうして沙門を保護するといふには保護する方法がある、保護するからといって侮辱してはい

ならぬ。儒教などになると、子が親に對する道徳は説いてある「父父たらすとも子は子たらざるべからず」といふ風に教へて居る。又妻の夫に對する道徳は「貞女兩夫に見えず」といふやうに説いてあるが夫が妻に對し、親が子に對する道徳的の考といふものが十分に説いてない、片務的になつて居る。今日の西洋流の個人主義になると、自分の都合ばかり考へて居るから對手方の事は考へない、妻は妻の利益のみを考へ、夫は夫の利益のみを考へて、妻の権利は何處までぢや……夫の権利は何處までぢや……といつて、権利と権利の分界を争ふやうになる、さういふ事は佛教の方から言つたならば甚だ面白からぬ事である。佛教の道風德香を以てやつて行けば、今言ふやうに親子の間、夫婦の間、師弟の間、主人と奉公人の間、親友の間、僧侶と檀家の間といふものがみな道徳的に考へられるのである。

以上は唯だ六方禮拜の一つに就て言ふのであるが

かぬ、乞食でも飼うて置くやうなつもりで、「私の家
があるからあなたも御飯が食べられるのでせう……」
其の衣も私の方から寄附したのでせう……」とい
ふやうな顔をしてはいかぬ、それが施主たる者の心
得である。又坊さんの方も施主に對しては五つの事
を考へて上方を拜まなければならぬ、それは（一）
佛教の信念と、その信念を實行する方法と、信念を
持續して行く事柄を第一に教へなければならぬ、
(二)さうして禁戒といふ道德的の教訓を與へ（三）
又佛教の智慧に關する善い事柄を教へ（四）その施
主がだん／＼布施の精神の發達するやうに導き、
(五)智慧の側に於ても相當な理解を打込んで行か
なければいけない、唯だ有難い／＼といつて、何年
経つても譯のわからぬやうな擅家ばかり抱へてはい
けない。斯ういふのが沙門の心得である。

斯の如くにして六方禮拜に就ての教訓の組合せ方
がズツと相互的に出來て居ることに注意しなければ

佛様はあらゆる場合に、五十年の永きに亘つての盡きざる説法教化に於て、懇々とこの人間の道徳的の和樂の精神を教へられた、それは實に至れり盡せるものである。それ故に佛教を信する者は心が和らいで来る。増一阿含經の利養品にて、
心^{しん}意^い和^わ悦^えにして慈^じ心^{こころ}を以て普く一方に満てゝ而も自ら娛樂す、二方三方四方も亦爾なり。
と説かれて居る通り、心のはたらきが和^わき悦^えんで、さうしてそこに慈悲の心が動いて、人の爲めに盡^すけれどもその親切を盡^すしながら而も自からそれを喜び楽しんで行く。さういふ精神がグルリ八方に動いて行くやうになる、それを佛法の修行と申して居るのであつて、大体は佛教といふものは心が和らいで優しい精神になつて、人をたすけながらたする中に自分の悦びが満ちて居るといふ、誠に何とも言へぬ工合の良いものが佛の教であり、釋尊の道風德香の感化であると思ふのである。

現代の社會はあまりに人心が荒らいで、闘争掠奪の精神が盛んになり、利己貪婪の精神が熾烈になり過ぎて居る。區々たる經濟上の政策や法律上の議論を聞かはして見ても、大体の人間の氣分が斯の如くに悪くなつて來ては到底世の中を教ふことは出來ない。孟子が「其の心に作つて其の事に害あり、其の事に作つて其の政に害あり、聖人後た起るとも我が言を易へず」と言つた通り、大体は人間の心が悪くなつてしまへば社會の現象も悪くなり政治も悪くなつてしまふ、社會問題をどうする……斯うする：「社會政策がどうだ斯うだ……と言つても、根本は人間の心が悪くなつて居るのである。其の心を矯正さないで社會問題だけを善くするといふことが出来る譯のものではない。日蓮聖人も「法は體、世間は影なり、體曲れば影斜めなり」と言はれた、その體が曲つて居るのに、影だけなほすといふことは出来るものではない。人間の心が體であつて、社會に現

はれて居る事はその心の體から映つて居る所の影である。其の影を捉えて政治上でああだ……斯うだ……と言つてもどうにもなるものではない、先づ其の心を善くする教化が第一であると孟子は言つた。たゞひ聖人が出て來ても此の自分の言ふ事には反対が出来ない、況んや通常の政治家や學者が反対し得べきことでないと彼は力強く言うて居るのである。さういふ意味に於て今日の時代の状態を見るに就けても、吾々は佛様に近づき、佛の教を戴いて居ることの悦びを感じて、倍々の信仰の培進をはかると共に、此の佛様の道風德香に依つて人心を和らげ、世の中を平和に導くことに努力しなければならぬと思ふ。(完)

立正大師の功勳

本多日生

四、菩薩行の應用者

それからいま一つは菩薩行の應用である。菩薩行の應用といふのは、菩薩行を實際問題に當嵌めて活用せられた點を言ふのである。菩薩行と言つても廣いものであるから色々の事があるけれども、殊に菩薩行を實際問題に當嵌めて應用せられた點が、日蓮聖人の功勳であると思ふ。そこに聖人の活きし、した運動が起つて、宗教を實際生活に一致せしめるとか、或は宗教が國家觀念と一致するとか、現在の文化を指導するとかいふことである。これは日蓮聖人が現在生活の上に信仰を持來つて洵に活きしした、正月の元日から南無妙法蓮華經と言つても少しも嫌味の無い洵に麗かな宗教となつたといふことは

その點である。他の方ではどうもそこがうまく行かない。例へば婚禮の席で南無阿彌陀佛ナンと言つたら非常に工合が悪い、ところが三々九度の盃の席に友人が居つて「南無妙法蓮華經」と唱へても、ちょうど祝杯を擧げるやうな快い心持になる。それを「ナンマイダーノ」と言つたならばどうしても婚禮の盃にはうつりが悪いといふものは、それだけその宗教に現實と一致しない點があるのである。日蓮聖人がさういふ風に活きしした意味に於てこの佛教を應用せられたといふことは非常な大きな事實である。

これも何も日蓮聖人に依つて佛教を造り變へた譯ではない。佛教そのものが初めからさういふものな

ンである。その事は大薩迦が嚴戒王といろ／＼お話ををして居る中に、佛教が國家觀念と一致することも國家のあらゆる文化の要素と協力して進んで行くこと、皆なそれが菩薩行として解釋されて居る。大薩迦の初めには文殊師利が釋尊に對して「これまで菩薩行のお話はたび／＼伺ひましたが、菩薩行の方便——菩薩行を實際問題に當嵌めて活用されると

いふことはどういふ事柄でありませうか」と言つた時に釋尊が「今日はその事に就て好い話がある」といふので、そこに大薩迦が現はれて佛教と國家の關係、佛教と政治の關係、佛教と戰爭の關係、經濟の關係、道德の關係、あらゆる現在生活の關係とを説いたのである。菩薩はさういふ人類文化を指導啓發して行くのである。佛教に盡すとか菩薩が行をやると言つたならば、たゞお經を讀んだり、鉢を叩いたりして居る事だけではない。人類のあらゆる文化を建設する運動のそこに菩薩行があるのであるから、

その事は日蓮聖人は最も能く説かれて居る。菩薩行が難行だとか難かしいとかいふことを法然等は言ふけれども、そんなものではない、鶏が卵を産んで日々その卵を温めて居る、あの有様、生れた雛に米粒を吐へてやり居るあの有様、あれが菩薩行である。鶏でも菩薩行が出来る。人間に出来ぬことがあるものかと日蓮聖人は言つたが、それ程に立派な應用を試みられた。その事は日蓮聖人が年漸く二十二の時に書かれた『戒体即身成佛義』といふ御遺文の中にある。佛教はどこまでも人間本位であつて、人間がある。

應用が含まれて居る。

であるから日蓮聖人の立正安國論を書かれたその國家觀念といふことは、決して聖人の獨創ではない。皆な法華經の菩薩行の中から割出された忠實なる法華の實行であつた。この事も明かにして置かなければならぬ。日蓮門下の人は直に佛教が非國家的のものであつたのを、日蓮聖人が國家的に焼直したといふやうな事を言つて、聖人を讃めようとする。永い間そんな事を言つて居るのである。何年経つても毎時迄もそんな事を言つて居つてはいかぬ。佛教ぐらの國家觀念に忠實なるものは無い。その影響を受けた日蓮聖人は立正安國論を書いたのである、その系統は能くわかつて居る「日蓮聖人の立正安國論」は「守護國家論」といふものを最初に書いてそれから安國論を書かれて居る。その守護國家論は傳教大師の「守護國界章」と言ふものから來て居る。その

守護國界章は「守護國界主經」と言ふお經があつてそのお經から傳教大師の守護國界章と言ふものが出て来るのである。さういふ風の系統があつて安國論に來て居ることは、これ等の書物の表題だけを見ても明瞭にわかつて居る。

斯の如く日蓮聖人は法華經の忠實なる實行者として、菩薩行の應用が實際生活の上に及んで、而してそれが國家思想その他あらゆる問題に活きした活動を現した、それはやはり忠實なる法華經の實行者であると考へて宜しいのである。

五、法華讃言の實行者

モウ一つ算へて置きたい事は、日蓮聖人が法華經の豫言を立派に体得せられたといふこと、これ亦大きな功勳である。法華經には「勸持品」に於いて、法華の行者は三類の敵人に會ふ。或る流罪に遭ひ、頸の座に坐り、焼打に遭ふといふやうな恐しい迫害

のある事が説かれて居る、然るに日蓮聖人はこれを一々身に讀まれて、所謂身讀色讀といふことをなされて、畏多いほどの艱難を事實に嘗められた、そのふことを身に讀んで法華の眞實を證據立てたもの艱難辛苦を通して、法華經はこの通り偽りは無いといふことを身に讀んで法華經を活かしたこと自からいふことを身に讀んで法華經を活かしたこと自からあると言つて、日蓮聖人は法華經を活かしたこと自から言はれて居る。

ところがその活かす意味合といふものを又下手な

者が「それ見い、日蓮聖人に依つて法華經は活きたんではないか」といふやうに聖人を威張らせるやうな言ひ方をするけれども、あれは非常にまづい。日蓮聖人のは決してさういふ意味ではない。法華經に依つて如何なる人間でも成佛を許されて居る、それは信じなければならぬけれども、如何なる人間でも成佛するとは言つても死んで行く先は見えないもの

の者が成佛するといふことも、吾々の眼には見えぬけれども間違ひはないのだすといふことが、法華の豫言を日蓮が身に讀むことに依つて、その本佛の事も、一切が成佛する事も信ぜられるといふ點に於て日蓮聖人は有難く考へて居られるのである、「現在眼前の證據あらんすらん人の是の經を説かば信するともありやせん」で、日蓮が法華の法難を身に讀んで、色讀者として法華經を宣傳するならば、その大事な佛様の有難い事も本當に信する人が出來るであらう。そこを自分は法悦とする、斯う言つて居られる。法難に遭つたから佛様を馬鹿にするといふやうなことになつて來るのはまるで聖人の心持ちとは違つたことになつてしまふ。

この法華の身讀といふことは大きな事実で、日蓮聖人の言はれる通りに、我等の心はその法難を通じて熱烈なる信念が燃えて來るのである、現寫の方は一通りわかつて、佛様の常住であること、その統一

神であるといふことを了解して居つても、何だかそれが又ボーッとして来る。又自分が永遠の實在を持つと考へて居つても、その思想がこもすれば潤れて来る。併し日蓮聖人の傳記を読んで見れば、寒い日に雪が降つて来る。併し日蓮聖人は佐渡の坂原三味堂に於て北風凜烈、雪は一丈も積つて居る中で開目録を書かれたといふことを考へると、自分の精神もピリ／＼とする、それが一番人間にはきゝが良いのである。非常な人生の煩さい事や辛い事に遭つてフラ／＼とした時にも、日蓮聖人が頭の座に曳出され途中で恥を興へられた、あゝいふ御法難を受けられた事を考へれば、ナニ此の位の事辛抱の出来ぬことはない。弟子は土の牢に入れられ、四條金吾は領分を取上げられた。併し「縊ひ乞食になるとも法華經には瑕璫を附け給ふべからず」と仰せられたのは此處ぢやといふ風に、その聖人の深刻なる法難を通して、吾等の熱烈なる信念が持續せられ、擁護され

るといふことは一番強い力である、基督教があの熱烈なる信念を維持したのも、彼の基督が磔になつたことに於て基督教徒には一種の強い力がある。日蓮聖人も一代の法難迫害、それが日蓮門下に一種の力を與へて行くのである。

その事を日蓮聖人もお考へになつたからして現在にそれだけの證據のある者が法華經を説けば信する人があるといふので、喜んで自から法難迫害に甘んじたのである。御勘氣を蒙むれば愈々悦びを増すべしといふことを佐渡ヶ島に着いた時に言はれて居る何故かと言へば、俺は流されて辛いやうだけれどもこの法難あるが爲に後來法華を信する者の信念に活き／＼した熱烈なる精神が燃えて来ると思へば、自分が一人寒い思ひをする位の事は何でもないといふので、佐渡ヶ島に着いた時に斯様に言はれて居ることは實に有難いことナンである。併し大聖人の御身に就いて考へて見れば、吾々をして燃ゆるが如き

信念を喚起さしめんが爲にあの冷たい雪の中に御苦勞をなさつたと考へれば、幾重にも感謝感激に堪へない次第である。

斯様にして末代に滅び行く佛教の正統を復興し、又衰へ行く道念を鞭撻して戴いて、それが爲にお互が徹力ながら、正法の信解を維持し得るかと考へれば、大聖人の功勳は實に感謝に餘りある次第である

【完】

肅白

今般御即位の大典に際し天杯御下賜の恩賞を蒙むり候處早速御懇篤なる御祝詞を辱ふし御芳情難有御禮申上候知法恩國の遺命萬一をも盡し得ざるに如斯御恩賞を蒙むり候段感銘の至に堪へず更に精進して法國の洪恩に報答せんことを期する次第に有之何卒向後とも御援助の程願上候 敬具



日什大正師略傳

第四回

故權大僧正竹内日照師記

三八

これより以後耳順の老駆を提げ、日蓮聖祖の法華身讀の音を聴びて大法宣傳に從事し一日片時も休みなく公家に奏聞する事三度武家を諫訴すること三度其の外名地に教化をしき處々に寺塔を創立した。弘和元年四月上人は眞間を發して其月の末の方京都に着き（宝町六條坊門）今の五條橋通りに到り天王寺屋通妙の宅に宿し、縁故を求めて天奏の機會を窺ふて居た先づ妙顯寺の貫主日齊に面會して奏聞の事を打ち合せ日齊の紹介を以て攝家應司中將に謁し舌端火を吐くが如き熱舞以て奏聞の儀を談じは同年六月二十二日鷹司中將の取り成しを以て二條關白義元公は和泉殿に於て對面した義元公尋ねて曰く、

なり、たゞし奏聞の事容易ならず、天氣を伺ひ而して何分の沙汰あらん」と上人拜謝して退出した。同月二十九日武家の管領に依つて宗義を諫訴したこと日將軍義光等持寺に参詣すと聞き奏狀を呈してかへつた。弘和元年七月六日後圓融天皇深く寂感あらせられ洛中弘法の輸旨と二位僧都の口宣を賜はつた。

二位僧都日什御坊

洛中弘法之事

御奏聞之處被聞食訖早營道場可弘一乘圓頓之教法旨勅免候所也専一宗之勤行宜奉祈寶祚延長四海安全者

天氣如此仍執達如件

永徳元年七月六日

左小辨 在判

「何れの國の僧何事を奏するか」上人安國論と目安とを擲げて曰く「下總國眞間弘法寺の僧法華宗弘通に就て奏聞の義あり其の大旨此書にあり」これより上人義元公の間に隨つて佛教諸宗の謬解天臺宗の權實雜亂正治國の大本民一統主義皇室中心の思想是れ日什の言上する所の法華經並びに立正安國論の骨髓である、法華經は一乘主義である、帝國は億兆一心主義である、日蓮のとく所の法國冥合の本旨こゝに存すされば、上人官有司之を信じ之を行はト國を擧げて大道の本源に歸し、民は悉く忠誠を捧ぐるに至ること明かである政に未法今時を救ふの大法は妙法五字の題目に限る事等種々の法門をのべ、仰ぎ願はくば、此の旨を天聽に達し妙法を廣布せんことを」と公の曰く「其の宗義明晰にして法門殊勝

二位僧都日什御坊
此外百韻連歌等の賜物があつた、上人は吾は但宗を弘むるにあり、爵位は願ふ所に非すとて二位僧都

上人更に京都に至り、亦奏聞をした二條關白の言ふには、我れ上人の所説を聞き稍々日蓮所立の宗要を悟つた。先づ洛中に寺を構へて法を弘めよ、主上有緣の檀信徒のために、鎌倉埋橋の邊に一寺を建立した、今の飯田村本興寺則ちこれである。

社寺建築及臺灣檜材の安價提供

(三年以上水蓄乾燥材)

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及工事の設計又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入用の向は御申越次第呈上仕候

(充分なる水蓄乾燥をなしたる臺灣最優良なるも水蓄不充分なる臺灣は千割狂ひ等の缺陷多きものあります)

東京市四谷區霞ヶ岡町十六番地
(明治神宮外苑内日本書年鑑正門前)

社寺工務所

(電話青山六〇二八番)

特大六ノ材	檜	臺灣
一、耐久防蟲		
二、蟲害絶無		
三、香氣清楚		
四、木質堅緻		
五、理整然木		
六、木高雅包		

神奈川縣鶴見町
社寺工務所鶴見支所
(電話青山六〇二八番)

福岡市外堅箱町馬出松原
社寺工務所福岡支所
(電話二二三〇番)

大阪市西區市岡町七十九番地
社寺工務所大阪支所
(電話西三三二四番)

昭和三年十一月廿四日印刷納本 (第四百五號)

料告廣一統		一	半	表紙	一	頁金	一	頁金	一	冊金	或拾錢	送料共	金
四 分		一			一		一		一	半	或拾	送料共	金
一		一		頁	一		一		一	半	或拾	送料共	金
金		金		金	金		金		金	金	或拾	送料共	金
五		五		五	五		五		五	五	或拾	送料共	金

製権許不

編輯人 小林順義 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
印刷人 鈴木日雄 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
印刷所 都印刷所 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
發行所 統一發行所 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
電話高輪六〇二四番

電話高輪六〇二四番
鐵捲東京五一〇七一番

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ